

芭蕉の雪の句に関する考察

竹 島 智 子

はじめに

芭蕉の色覚語の内、白の句が最多数を占めることは、既に述べたのであるが、本小論では、白の代表ともいふべき雪の句について、西行の『山家集』及び貞門・談林俳諧と比較しつつ考察したい。

「雪」については、『山之井』に、

かんじきやそりにのらんこしの旅人をおもひやり、ふすま雪とかぶり、かたびら雪をかづきありくおほぢのていをながめ、友をたづねし王子猷の其のむかし、簾をかゝげたる白居易のふること、庭のしろたへに、かひのしらねを思ひ、おまへにつもれるを、富士に作りなし、住吉の姫のなまげ、源氏のみやびなごをも思ひよせ、猶、雪ころばかし、雪うち、手をふきあへぬ人の形勢、雪やこんこといひはやし、空にむしわくとみはやすわらはべの分野どもをも、つらねなす。

と記載されている。

1 『山家集』における雪の歌

芭蕉が尊敬していた西行は、作歌において雪をいかにとらえたのか、『山家集』によって調査する。(新潮日本古典集成『山家集』を底本とし、歌番号も同書によった。)

『山家集』に見える雪の歌は、次表のとおりである。

雑	冬	春	部別別
			歌 番 号
975	585 512	126 11	合 計
1064	・ ・	・ ・	
1430	588 524	137 18	
1065	・ 〱	・	
1431	569 543	19	
1066	・ の二十首	61	
1432	570	105	
1155		・	
1483		112	
〱 1360		113	
1492			
〱 1365			
の十首			
二十四首	二十五首	九首	

合計五十八首の内、部立別では、冬が最多数を占め、次いで雑となり、春は少ない。

内容的には、大部分が叙景的発想の歌で、叙景歌でない述懐歌は、531・532・533・534・543・565・568・569・570・1485・1491・1492で、合計十二首である。残り四十六首が叙景歌である。

また、体言止めの歌は十八首で、体言止めでない歌の方が二倍余り多い。体言止めの歌を部立別に見ると、春では、11・61・105・113の五首で、春の雪の歌の内、5/9の比率で、半数近く占めている。冬では、525・526・529・536・537・538・541・568・569の九首で、冬の雪の歌の内、9/25で36%の比率である。雑では、975・1431・1483・1485の四首で、雑の歌の二十四首の内、4/24で17%となり、比率は少ない。

次に、(イ)叙景歌と(イ)述懐歌に二大別して、『山家集』の雪の歌について考察したい。

(イ)叙景歌

- 61 雪とちし谷の古果を思ひ出でて花にむつるるうぐひすの声
庭ノ雪 似^レ月^ニ
- 112 山おろしの木のもと埋む春の雪は岩井に浮くも氷とぞ見る
庭ノ雪 似^レ月^ニ
- 526 木の間洩る月のかげとも見ゆるかなはだれに降れる庭の白雪
雪 埋^レ竹^ヲといふこと
- 535 雪うつむ園の呉竹折れ伏してねぐら求むるむらずめかな
雪ノ歌よみけるに

538 なにとなく暮るるしづりの音までも雪あはれなる深草の里
541 卯の花のこちこそすれ山里の垣根の柴をうづむ白雪

1302 花と見るこずゑの雪に月さえてたとへん方もなき心地する

1490 晴れやらで二村山に立つ雲は比良の吹雪の名残りなりけり

いずれの歌も西行らしい清澄な趣がある。112では、岩井に浮く花を氷と見立てた西行ならではの歌である。535では、「竹に雪折れなし」といわれるその竹が「折れ伏し」ているほど、雪が深く積もってしまい、ねぐらを求める群雀をとらえている。1302は、雪月花を一首中に詠みこんで、西行歌の清明な特色がよくあらわれた佳作である。雪を花に見立てる趣向は、紀貫之など古今集の歌人たちがよく用いている。

(イ)述懐歌

- 秋頃、高野へまるるべき由たのめてまるらざりける
人の許へ、雪降りてのち、申し遣はしける。
- 531 雪深くうづみてけりな君来やと紅葉のにしきしき山路を
雪ノ朝待^レ人^ヲ
- 532 わが宿に庭よりほかの道もがな訪ひこん人の跡ついで見ん
雪に庵埋みて、せんかたなくおもしろかりけり。
いまも来たらばと詠みけんこと思ひ出でて、見ける
ほどに、鹿の分けて通りけるを見て
- 533 人来ばと思ひて雪を見るほどにしか跡つくることもありけり
雪ノ朝会^レ友^ニ

534 跡とむる駒のゆくへはさもあらばあれうれしく君にゆきに
あひぬる

543 訪へな君夕暮になる庭の雪を跡なきよりはあはれならまし
565 吉野山麓にふらぬ雪ならば花かと見てやたづね入らまし

仁和寺の御室にて、山家_ニ閑居_テ見_ル雪_トといふこと
をよませ給ひけるに

568 降りうづむ雪を友にて春来ては日を送るべきみ山辺の里

山家冬深し

569 訪ふ人は初雪をこそ分け来しか路とちてけりみ山辺の里

山居ノ雪

570 年のうちは訪ふ人さらにあらじかし雪も山路も深き住処を

1485 あはれ知りて誰か分け来ん山里の雪降り埋む庭の夕暮

1491 雪しのぐ庵のつまをさしそへて跡とめて来ん人をとどめん

1492 くやしくも雪の深山へ分け入らで麓にのみも年を積みける

述懐歌は、風景描写にとどまらず、作者の心境や思想を伝えている。532では、朝の雪景色を友と見たいという心と、反面雪に人の足跡がつくことを惜しむ心とが複雑に交錯しておもしろい。自然を愛する心の反映と見られるであろう。それに反し、543では、夕暮の雪は「跡なきよりはあはれ」として、友の訪れを願っている。これは朝ではなく、夕暮だからなのであろうか。自然と人間とに比重の置き方が、時により変わることがおもしろい。

1491では、雪に堪えるよう補強して自分の足跡を尋ねてくる人を滞在させようとしていて楽しい。1492では、釈迦が入山し修行した雪山

を指し、むなしく年を過してしまったことの述懐が濃厚である。後述するように、芭蕉の句には自嘲的な句はあるが、このようにむなしく歳月を経た悲哀の濃厚な句は見られないことが注目される。このことは、芭蕉に比し、出家した西行が、より宗教的求道心が深かったものと推察される。

二、貞門俳諧における雪の句

『貞門俳諧集』一・二（古典俳文学大系）を底本として、雪の発句を調査する。

『はなひ草』には「四季之詞」として、十一月に「雪」を入れている。雪の発句は、『犬子集』『崑山集』『時勢粧』『続山井』『天水抄』に多数見られる。その内、「宗房」名で芭蕉の句が見えるのは、『続山井』（北村湖春編 寛文七年十月刊のみである）。

『続山井』に雪の発句は11句収録しており、中でも、北村季吟の句一句及び藤堂良忠（俳号蟬吟）の句一句と共に、芭蕉の句は三句に見えているので、便宜上通し番号を付けて次に示す。

竹庵浄雪追悼に

- ① 習ひながら雪をれ竹のうき世哉 季吟
- ② 餅のかはむくとやいはん雪丸げ 蟬吟
- ③ 時雨をやもどかしがりて松の雪 宗房
- ④ しほれふすや世はさかさまの雪の竹 宗房

⑤ 霞まじる帷子雪はこもんかな

宗房

①は、「雪をれ竹のうき世」をとらえた追悼句で、④は、謡曲「竹の雪」をふまえ、凍死した子を母の嘆く場合をとらえており、共に雪竹をとらえた哀傷の句である点に、類似性がある。

次に、季吟と芭蕉について少し考察したい。明暦二年に、季吟は宗匠として独立した。同年二月、芭蕉は十三歳で、父松尾与左衛門と死別している。以後、藤堂家へ出仕し、蟬吟の近侍となり、季吟にまみえたと推察される。しかし、季吟と芭蕉については、どの程度の間柄か不明であるが、少なくとも「師事という確証は無いとしても、寛文のころには相互が意識する何物かがあり、その程度の関係があったということだけは認めなければならぬと思うのである。」（野村貴次博士著『北村季吟の人と仕事』所収「芭蕉との関わり」というお説は納得できる。むしろ、「芭蕉が訪れた時、最も接触し指導なり世話を焼いたのは湖春であったとみたいのである。」（前掲書）と記載されているように、季吟の長男湖春との親交から、『続山井』に、芭蕉の発句二十八句と付句三句という多数が入集したものと考えられる。

④は、寛文六年冬の作であるが、同年四月には、蟬吟が二十五歳で夭折しており、親を残した逆縁の死であった。以後、芭蕉は藤堂家を去ることになるが、大変な心痛であったことは想像に難くない。④には、謡曲をふまえると共に、蟬吟の逆縁の死が背景にあったのではなかろうか。

②は、無邪気に「雪まろげ」をとらえており、後に芭蕉も、貞享

三年には、

君火を焚げよきもの見せん雪まろげ
と、門人曾良に親しく詠みかけており、②同様、結句に「雪まろげ」を置いて稚気あふれている。

⑤は、「帷子」から「小紋」を連想した滑稽味があつて、楽しい。次に、『続山井』から、他の俳人の作品を抄出する。

面白し野山も雪の花ばたけ

信澄

降雪に鳥はしろりくろり哉

行好

朝には落花をふむや雪の道

概純

かねにきせてなりやまするや袈裟の雪

祐元

よろよろとよわりふしたり雪の竹

致因

いずれも滑稽味はあるが、詩情に乏しく、もう一步といった感がある。

三、談林俳諧における雪の句

『談林俳諧集』一・二（古典俳文学大系）を底本として雪の発句を調査する。

雪の発句は、『ゆめみ草』『境海草』『続境海草』『俳諧当世男』『俳諧東日記』『談林功用群鑑』『俳諧物見車』『俳諧江戸通り町』『江戸広小路』『俳諧坂東太郎』『阿蘭陀丸二番船』『洛陽集』に多数見られる。

「桃青」名で芭蕉の句が見えるのは、『俳諧東日記』に一句、

貞享 元禄①	元禄⑯						
	七	六	五	四	三	二	元
935	865	829	781	680 ・ 741 ・ 747	663 ・ 664 ・ 673 ・ 675 ・ 676	599 ・ 601 ・ 604	470 ・ 471
一句	一句	一句	一句	三句	五句	三句	二句

本表のとおり、成立年次の明らかなものでは、貞享四年が七句で、最多数を占め、次いで、貞享三年及び元禄三年の五句、貞享元年の四句、寛文六年及び元禄二年の三句となる。雪の句四十五句の内、貞享四年は、約半を占めていることになる。

これには、貞享四年十月二十五日、『笈の小文』の旅へ出発したことが要因をなしていると思われる。貞享四年の六句中、『笈の小文』に見られる作品は、337〜340の四句である。但し、『笈の小文』は、乙州が、芭蕉の未完草稿を編成したもので、主たる執筆時期は、『奥の細道』旅行後の元禄三年から四年にかけてと推定されることは、(生)綱島三千代氏が論述されたとおりであろうと推察される。

五、芭蕉の雪の句について

次に、芭蕉の雪の句を年次順に配列して考察する。

(1) 寛文年間

20 時雨をやもどかしがりて松の雪

子に後れたる人のもとにて

21 萎れ伏すや世はさかさまの雪の竹

22 霰まじる帷子雪は小紋かな

27 餅雪を白糸となす柳かな

34 波の花と雪もや水の返り花

20では、松を擬人化しており、「松」と「待つ」との掛詞が見られ、21では、「世」と「節」の掛詞が見られる。22では、「帷子」の縁で小紋を連想している。27では、柳が白糸餅を作ったとする擬人表現で、「白糸」は「餅」及び「糸」と「柳」も縁語である。34では、波の花を雪の返り花かと思立てた機知のおかしみがあり、「雪」と「花」は縁語で、「行き」に掛けて、「返り」とも縁語仕立てである。

以上、寛文年間の句は、掛詞や縁語を多用して、擬人法を用いており、俳諧本来の滑稽味をねらった機知的表現が用いられている。芭蕉も、二十歳代には、当時の俳壇流行の手法を学んで用いていたことが知られ、興味深い。

(2) 延宝年間

111 今朝の雪根深を園の技折哉

富家ハ喰ニ肌一肉一_ヲ 丈夫ハ喫ニ菜一_根一_ヲ。予ハ乏し127 雪の朝独り干鮭を噛み得_テ

111は、叙景句ではあるが、白一色の雪の中、根深(葱)の緑がのぞいており、色彩の対比が鮮明である。「枝折」に見立てたところが、俳諧である。

127は、六・八・五の字余りの句で、漢詩調である。『菜根譚』を踏まえ、作者の個性が強く表現された自嘲的な心境句である。127に対し、「逆説的ながら、自負の姿をそこにみることが出来る。」(市古貞次編『芭蕉集』)とされ、また、広末保氏は、「貧しさを隠者ふうの衝う態度のなかには、その貧しさを、やがて精神の方法として、自虐的にしろ、とらえなおしていくという可能性がふくまれていないわけではない。」(『可能性としての芭蕉』)とされているが、納得できるお説である。三十歳代には、このような漢詩調の濃厚な作品が多く、個性的になっている。

(3) 天和年間

155 雪の鮓左勝水無月の鯉

161 夜着は重し呉天に雪を見るあらん

昼顔剛勇

175 雪の中は昼顔枯れぬ日影哉

猫山

178 山は猫ねぶりて行くや雪の際

黒森

181 黒森をなにといふとも今朝の雪

155は、句合形式を一句の中に詠みこんだ新奇な談林調である。161は、『詩人玉屑』をもじった漢詩調である。175は『禪林句集』の心をふまえ、雪中の昼顔を虚構し、昼顔の強靱さに焦点をあてている。178は、「猫山」から猫の性を連想して春の雪間にかこつけた縁語的発想による見立て句である。181は、黒森と雪の白さが対比され、俳諧味をもたせている。

以上、天和年間の作品は、新奇をねらったり、漢詩調であったりして、未だ内面的な深さには乏しい。

(4) 貞享年間

桑名本統寺にて

216 冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

旅人を見る

220 馬をさへ眺むる雪の朝哉

雪見に歩いて

225 市人よこの笠売らう雪の傘

226 雪と雪今宵師走の名月か

我が草の戸の初雪見んと、余所にありても空だに曇り
侍れば急ぎ帰ることあまたたびなりけるに、師走中の

八日、はじめて雪降りけるよろこび

279 初雪や幸ひ庵にまかりある

280 初雪や水仙の葉のたわむまで

深川雪夜

281 酒飲めばいとど寝られぬ夜の雪

曾良何某はこのあたり近く仮りに居を占めて、朝な夕なに訪ひつ、訪はる。われ食ひ物いとなむ時は柴折りくぶる助けとなり、茶を煮る夜は来りて氷をたたく。性、隠閑を好む人にて、交り金を断つ。ある夜、雪を

訪はれて

282 君火を焚けよきもの見せん雪まるげ

285 月雪とのさばりけらし年の暮

不二

321 一尾根はしぐるる雲か富士の雪

伊羅古に行く道、越人酔うて馬に乗る

327 雪や砂馬より落ちよ酒の酔

335 面白し雪にやならん冬の雨

熱田御修覆

337 磨きなほす鏡も清し雪の花

338 矯めつけて雪見にまかる紙子哉

339 いざさらば雪見にころぶ所まで

340 箱根越す人もあるらし今朝の雪

216 は、亭主への挨拶をこめて、世にない物と作意した技巧的な句

である。220は、作者自身も旅人なのに、今は亭主のもてなしで、雪路の旅人を人ごとのように眺めているという句である。225は、雪見に興ずる風狂の心を表している。226は、仲裁の心を寓意的に詠んでいる。279は、風狂人の興じている心象風景を表現している。280は、初雪が期待する分量まで降ってくれた喜びを微妙にとらえ、雪の白さと水仙の葉の緑とを印象的にとらえている。この句には、従来の作品になかった微妙な陰影がこもっていることに注目される。281は、感受性の鋭い自画像が表現されている。282は、「雪まるげ」という兒戯に、無邪気な童心がこもり、風狂の心が表現されている。285は、年の暮に、自らの生活態度を反省している心境句である。321は、一点にスポットをあて、富士山の雄大さを描き出している。327は、戯れの中に越人への親愛感があふれている。335は、雨から雪に変わることの無邪気な喜びを表現している。337は、汚れない鏡と雪で、熱田神宮の神々しさを象徴しており、この句も従来の作品には見られなかった象徴性が見られ、注目される。338は、紙子の皺を伸ばして雪見に行くところに興じる態度が見られる。339は、はずんだ調子の風狂体が見える。この句については、

ただ雪見に出かけようというだけなら、それは風流の域にとどまるが、「ころぶ所まで」行こうとなると、これはもはや、俳諧の物好きでいわば風狂の境地である。

(宮本三郎・今栄蔵著『松尾芭蕉』)

と記載されているとおりであろう。340は、雪の箱根路に悩む旅人を思いやって、当家の厚遇に対する謝意を暗示している。

以上、貞享年間の作品は、大別すると次のようになる。

- ① 亭主への挨拶、謝意を表現した句——216・220・340
 ② 興じる風狂心を表現した句——225・279・327・282・335・338・339
 ③ 自画像や生活態度を表現した句——281・285
 ④ 叙景・寓意的な句——226・280・321・337

雪見に興じて風狂心を表現した句が、最多数の七句を占め、貞享年間の十六句中、7/16となり、44%という半数近い率を示している。童心に帰って無邪気に興じている様子は、滑稽を主体とした俳諧精神の発露といえよう。風狂を「反俗の詩精神」ととらえる伊藤博之氏「風狂の文学」(『日本文学』昭和40年9月号)や赤羽学博士「芭蕉の風狂性」(『芭蕉俳諧の精神』)の学説は、世俗離れた風狂心において納得できる。

また、作品の内容上、前記のように、280の貞享三年冬の作品と、それ以前とは、大きな差違が認められ、雪の句に関しては、貞享三年で二分できるように思われる。前表で示したように、貞享二年には、雪の作句は見られない。貞享三年以降、象徴性を帯びてきている。貞享三年冬は、「閑居の箴」として有名な文が、281の句の前に次のように記載されている。

あら物ぐさの翁や。日ごろは人の訪ひ来るもうるさく、人にもまみえじ、人をも招かじと、あまたたび心に誓ふなれど、月の夜、雪の朝のみ、友の慕はるるもわりなしや。物をも言はず、ひとり酒のみて、心に問ひ心に語る。庵の戸おしあけて、雪をながめ、または盃をととりて、筆を染め筆を捨つ。あ

ら物ぐるほしの翁や。

雪を眺めつつ、共に語るべき風雅の友を慕って、自問自答している様子がうかがえる。尾形仇・編『芭蕉必携』(学燈社)の「芭蕉年譜」によると、

貞享三年冬、庵を訪れた曾良に対し、「雪丸げ」の句文を草す。(中略)このころ、芭蕉庵の近くに住み薪水の労を助けていた。とあり、貞享三年冬の頃、曾良が、芭蕉の薪水の労を助けて、芭蕉庵付近に住んでいたことがわかる。

(5) 元禄年間

尾張の十蔵、越人と号す。越路の人なればなり。粟飯・柴薪のたよりに市中に隠れ、二日勤めて二日遊び、三日勤めて三日遊ぶ。性、酒を好み、酔和する時は平家を謡ふ。これ我が友なり

470 二人見し雪は今年も降りけるか

雪の夜の戯れに題を探りて「米買」の二字を得たり

471 米買ひに雪の袋や投頭巾

山中に子供と遊ぶ

599 初雪に兔の皮の髭作れ

南都にまかりしに、大仏殿造営の遙けき事を思ひて

601 初雪やいつ大仏の柱立

大津にて智月といふ老尼のすみかを尋ねて、己が音の少将とかや、老の後このあたり近く隠れ侍りしといふを

604 少将の尼の咄や志賀の雪

旅行

663 初雪や聖小僧の笈の色

信濃路を過ぐるに

664 雪散るや穂屋の薄の刈り残し

673 ひごろ憎き鳥も雪の朝哉

675 比良三上雪さしわたせ驚の橋

応^ニ定光阿闍梨之覚^ニ

あなたふと、あなたふと。笠も貴し、蓑も貴し。いかなる人か語り伝へ、いづれの人か写しとどめて、千歳の幻、今ここに現す。その形あるときは、魂またここにあらん。蓑も貴し、笠も貴し

676 たふときや雪降らぬ日も蓑と笠

680 木曾の情雪や生えぬく春の草

耕月亭にて

741 雪を待つ上戸の顔や稲光

世の中定めがたくて、この六とせ七とせがほどは旅寝がらに待れども、多病苦しむに堪へ、年頃因み置きける旧友門人の情忘れがたきままに、重ねて武蔵野に帰る頃、人々日々草扉を訪れ待るに答へたる一句

747 ともかくもならでや雪の枯尾花

781 庭掃きて雪を忘るる帯かな

深川大橋半かかりける頃

829 初雪や懸けかかりたる橋の上

865 たわみでは雪待つ竹の気色かな

470 は、去年の冬の旅を想起して、素直に懐しんでおり、越人に対する信頼感と親近感が融合した暖かさが感じられる。471 は、「雪」に「行き」を掛け、近所の無名俳人を相手に心なごんだ風狂心が見られる。599 は、久しぶりの故郷で童心に帰って興じている様子がかがえる。601 は、露座の大仏が初雪をかぶっている姿の悲しさと殿舎の落成を危ぶみ嘆く心が見える。604 は、智月尼を少将の尼になぞらえる心で讚えた初対面の挨拶句である。663 は、色あせた笈が回国の長さを語っており、『芭蕉必携』にも記載されているように、黒と白の対比とみてよいであろう。664 は、寒々とした信濃路の冬景色をとらえている。673 は、雪の朝には日頃憎く思っている鳥も風情があるにとらえた。675 は、七夕伝説から連想して、「鵲の橋」を俳諧化して興じている。676 は、謡曲『卒都婆小町』をふまえ、小町の崇高さを思い描いた。680 は、消え残る雪に芽ぶく春草をとらえて楽しい。741 は、雪見酒を期待して面白く興じている。747 は、長旅にやつれた衰老の身を枯尾花にたとえた。781 は、自画の寒山像に加えた画讃句である。829 は、深川大橋への期待をこめて作った。865 は、竹の図柄にあわせた即興作である。

以上、元禄年間の作品は、大別すると次のようになる。

① 挨拶句——604・747

② 興じる風狂句——471・599・675・741

③ 回想句——470

④ 叙景句——601・663・664・673・680・829
 ⑤ 画讃句——676・781・865

叙景句が六句で最も多く、元禄年間十六句中、叙景句の占める比率は、 $6/16$ で、38%となる。また、貞享年間に最多数を占めた風狂句が、第二位となっている。元禄年間では、風狂句の占める比率は、 $4/16$ となり、25%で、 $1/3$ 以下に低下していることが注目される。このことは、貞享年間に比し、元禄年間は、風狂性に乏しいといえよう。

さらに、叙景句の内、601以外は、すべて元禄三年以降の作で、元禄三年の軽み唱導が影響しているものと考えられる。風狂というポーズをはらって、さらりとした作風が増してきている。

前表に示したように、元禄五年以降は、雪の作句がきわめて少なくなつた。五、六、七年各一句で、しかも、五年と七年は、共に画讃句である。前稿（金）で表示したように、雨の句は、元禄五年では二句、七年では七句見られるのと対照的である。もっとも、雨は、四季を問わないもので、雪は、主として冬であることも起因するであろうが、それにしても、元禄五年以降の晩年に雪の作句がきわめて少ないことが注目される。

それでは、元禄五年冬頃には何か心境上の転機があったのだろうか。元禄五年冬は、散文では、十一月の「机の銘」があるのみで、書簡も発見されていない。「机の銘」は、

閑しづかなる時は、ひぢをかけて、嗒焉吹嘘の気を養ふ。閑なる時は、書をひもどいて、聖意賢才の精神を探り、静なる時は、

筆をとりて、義・素の方寸に入る。（下略）

とあるように、閑窓浄机を愛する芭蕉の心境がうかがえる。以前にも増して、内面の充実をはかろうとしているように思われる。

尾形竹・編『芭蕉必携』（学燈社）の「芭蕉年譜」によると、「元禄五年冬、素籠が大坂より下つて来て芭蕉庵を訪う。」とあるのみで、他に、元禄五年冬頃には、特記事項も見あたらない。これは、元禄五年冬に、芭蕉は、素籠に、奥の細道原稿の構想が大体できあがって、清書を依頼したのであろう。ただし、奥の細道原稿の完成は、元禄六年冬か七年春と推定されることは、既に前稿（生）で記載した。芭蕉は、素籠に清書を依頼した後も、約一年間にわたって、推敲を重ねたものと考えられる。従つて、元禄五年冬は、奥の細道の原稿完成をめざして意欲的となり、従来のように雪を観照するような心境にはなりえなかつたのではなからうか。それだけ芭蕉は、奥の細道の原稿完成に心血を注いだと考えてよいであらう。

おわりに

以上、本小論においては、

一、芭蕉に比し、西行が、より宗教的で求道心が深いことが、むなしく歲月を経たことの悲哀の濃厚な作品がみられる素因となっていること。

二、1『続山井』に芭蕉の句が多数入集しているのは、季吟の長男湖春との親交からであること。

2 「しほれふすや」の句は、蟬吟の逆縁の死が背景であったと見られること。

三、談林俳諧では、芭蕉がより真面目で、全般的に、文学作品としてはもう一步といった感じで、このことが蕉風樹立の要因となっていること。

四、1 芭蕉の雪の句に関しては、貞享三年で二分でき、貞享三年以降象徴性を帯びてくること。

2 貞享年間に比し、元禄年間は風狂性に乏しく、軽みへとつながること。

3 元禄五年以降、雪の作句がきわめて少ないのは、奥の細道の原稿完成に心血を注いだのではなからうかと推察されること。

などが要点であった。以後も、考察を深めていきたい。

注

1 拙稿「芭蕉の色覚語に関する考察」〔樟蔭紀要〕第七号）
紀貫之の『古今和歌集』歌に、

冬の歌とて詠める

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしらね花ぞ咲きける
雪の木に降りかかりけるを詠める

冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける

とある。

3 拙稿「芭蕉の五月雨の句に関する考察」〔樟蔭国文学〕第二十五号）

4 『連歌俳諧研究』第二十五号所収「『笈の小文』成立上の諸問題」

5 この句については、「昔、先師此句を語りたまふに、予甚だ感動す。先師曰く、是を悦ばん者、汝と越人のみと思ひしに、果してしかりとて、殊更の機嫌なりし」〔去来抄〕とある。芭蕉は、多数いる門人の中でも、去来と越人に対して、このような戯れの境地を理解できる者と考えていたようである。